

話は伊達家にもどる。前にも數々記した通り伊達家には種々な黨派があつて、それが爲に奥山大學と云ふ一癖のあつた家老も引込んでしまつて、茂庭が代つて政治をするやうになると同時に奉行の顔が大分新しくなつた。そしてそれらはみんな伊達家では大身であつた。中にも原田の家は八千石取りで信夫郡信夫に在城し、伊達の原田と云へば聞えた家柄であつたが、今度愈々奉行職になつた。講釋師などの話に依ると此人は大器量人であつて、兵部少輔と一所に心を合して伊達の家中を掌握し、善惡ともに專權を揮つたやうであるが、これは事實ではない。原田は左様に勝れた伶俐な人ではなかつた。目から鼻へぬける才子であつたなど云ふことは全く嘘である。畢竟平凡な竝の人であつた。かういふ人物であつたのに世間から丁度惡黨の頭であるやうに云はれたのは怪しからぬ。事實を云へば何にも原田にえらい所があつてさう云はれるやうになつたのではない。原田は寧ろ目付などの御先きに使はれ、うまく利用されたのに過ぎない。しかし原田は一個の傀儡に過ぎなかつたに於て、外面から見れば兵部少輔と原田とは一つ腹で、何事も原田が切つて廻した様に見えたものであるから、原田は大に其人物の價値を買取られた。そこで原田もだん／＼威勢が出たので、元來餘り伶俐の方でないから調子に乗つて幅を利かして來た爲に、遂には其外の家老は有れども無きが如くになつた。何んでも外記や志摩が家中に指圖をしてかういふやうにせよと云ふ其迹から、原田が兵部の旨を受けて又指圖をして、さうしてはならぬかうせいと云ふやうな仕義で、家中も方向に迷ふ次第であつた。そこで外記もこれでは一統の束をする譯には行かぬ、家老だけは是非評定を一つにして後見職の餘計な世話焼きを防がねば

ならぬと覺悟して原田と古内に相談をかけた。其旨意は、御同様に元老の席を汚して諸士の上に立ち御家の政治を取扱ふ上は、何卒意見を一にして何事も評定一決の上を取扱ひたく存ずるなり、かくしてこそ幼君の爲めに外侮を防ぐものと申すべきに候はずやと云つた。これは原田が兵部少輔一黨に使はれて、いろ／＼兵部の都合のよいやうな働きをするのを心悪く思ふ所から、國老だけは議論をまとめて事を仕様と云ふ口實で原田を抑へる積りであつた。古内は固より柴田と同じ意見であるし、柴田が原田を抑へようとする苦心も知つて居るから、柴田氏の御發議は如何にも御尤もの次第であつて無論御同意であると答へた。しかし原田は同意しない。銘々幼君を御大切と思へば所存のほどは遠慮なく申さねばならぬ。是非に相談一決せねばならぬとあれば、所謂比周朋黨の類ではあるまいか。兵部少輔殿既に柳營より後見職仰せ付けられてあれば、銘々の評定一致しがたき時は兵部殿の指圖に従ひ候べきこと當然の儀では御座らぬかと云つて、柴田の相談に乗らない。是も一理のあることであるから、柴田も古内も如何ともすることが出来なかつた。勿論、此兩人に甲斐を壓へ付ける程の膽もあり度胸もあつたれば何でもない。しかし二人は英雄肌の男ではなかつたから、とう／＼其儘泣寝入りになつてしまつた。そして兵部少輔と其黨とが殆ど無人の境を行くやうに振舞つた。前の奥山は人物ではあつたが、兵部と結ばなかつたので孤立した爲めに直に倒された。今度の原田は兵部及び其部下の好い道具となつて使はれたから中々倒されず、とう／＼十年許りの間國老の職に居て、外面からはたしかに仙臺一藩を自分の思ふやうにした様に見えた。

一 比周朋黨 主義や利益を同じくする者同士が仲間を作つて結託し、仲間以外の者を排斥する事。